

# 三鷹市山本有三記念館館報

Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report

号  
3 2010.6

## ●展示資料紹介

「新小説」第27年第11号

1922(大正11)年10月 春陽堂

●開催中の企画展

## 小説家 山本有三の時代

—「生きとし生けるもの」から「波」まで—



有三初の長編小説「生きとし生けるもの」は、1926(大正15)年9月から12月まで朝日新聞に連載されました。当時の風俗を取り入れつつ貧富の種々相を対比的に描いたこの作品は好評を博し、第二作「波」も1928(昭和3)年7月から11月にかけて同紙に連載されました。我が子の出生の疑惑に苦悩しながら生きる小学校教師の物語は大きな話題を呼び、主人公の内面の発展を描いた教養小説として有三の代表作の一つに数えられています。

本展ではこれらの作品世界を、直筆原稿や映画資料などを通してご覧いただくと共に、小説家・山本有三の誕生や連載小説の執筆にまつわるエピソードをご紹介します。

◆◆◆◆◆

また新企画展の開催にあわせ、常設展示「有三の生涯」の展示替えを行いました。文学に親しんだ少年時代から劇作家として活躍した大正時代までを重点的にご紹介し、企画展と続けてご覧いただくことで、有三の前半生を眺めることができます。

山本有三(1887-1974)は劇作家として出発し、大正後期に「生命の冠」「嬰児殺し」「坂崎出羽守」「同志の人々」などの力作を発表しました。劇作家としてゆるぎない地位を確立した有三は、友人菊池寛の強い勧めにより小説の世界へ進出します。

山本有三(1887-1974)は劇作家として出発し、大正後期に「生命の冠」「嬰児殺し」「坂崎出羽守」「同志の人々」などの力作を発表しました。劇作家としてゆるぎない地位を確立した有三は、友人菊池寛の強い勧めにより小説の世界へ進出します。



山本有三「兄弟」収録  
「新小説」春陽堂 1922年10月発行

有三の初めての小説は、春陽堂発行の「新小説」に掲載された「兄弟」という作品です。無邪気にきのこ狩りをする幼い兄弟が、無断で山に入ったことを咎められ、喧嘩をしつつも手を取り合って家路につく様子が描かれています。

一人息子として育った有三は、兄弟への憧れを込めて、戯曲「ウミヒコ・ヤマヒコ」や「盲目の弟」などの作品で兄弟喧嘩を描いています。また「生きとし生けるもの」中絶の直前に描かれる諫早靖一郎と弟の取組み合いの喧嘩も、印象的な場面といえるでしょう。

「兄弟」はわずか5ページほどの短い作品ではありますが、同年に金星堂の「隨筆感想叢書」の一つとして刊行された『塵勞』を始めとし、多くの選集や文学全集に収録されています。特に有三の生前最後に相次いで刊行された自選集『山本有三自選集』(1967(昭和42)年集英社)と『名作自選日本現代文学館 無事』(1972(昭和47)年ほるぶ出版)にも収録されていることから、この小品とも言える小説に、有三自身が深い愛着を持っていましたことがうかがえます。

(文芸企画員・学芸員 渡辺美知代)

# ヨーロッパ近代文学と山本有三

鹿島 茂

山本有三という名は一九六〇年代まではビッグ・ネームであった。その証拠に、各種の日本文学全集において山本有三の巻の配本は早い方で、芥川龍之介や夏目漱石の次くらいのグループに属していた。

しかし、受容研究の立場からいようと、山本有三

は芥川や漱石とは違った階層から支持されていた作家であるといえる。芥川や漱石が東京の山の手の中産階級の人気作家であるとしたら、山本有三は、中産階級への移行を目指して刻苦勉励するタイプの下層中産階級のアイドル作家であった。

た。

一冊もなかった。ひとことでいえば、およそ文学や学問などとは無縁な環境だったのだ。

ところが、そんな中にあって、山本有三は例外的に「読まれていた」作家であった。とりわけ、『路傍の石』は我が家でしばしば口の端にのぼっていた。

その理由は、『路傍の石』が父親の唯一の愛読書だったからである。大正三年生まれの父は長男

で酒屋の跡継ぎということもあり、中学校（旧制）進学を希望したにもかかわらず、祖父から「商人に学問はいらない」と一蹴され、尋常小学校高等

科を終えた後、泣く泣く東京の呉服屋に奉公し、その後、苦学して夜間の商業学校を卒業したという経歴を持つ。そんな父にとって『路傍の石』の

そのメンタリティは典型的な下層中産階級のそれ、家の中には本と呼べるようなまともな本は

いた。なぜ、こうした断言が可能かといえば、私の実家は、江戸時代から横浜で酒屋を営んでいたが、そのメンタリティは典型的な下層中産階級のそれ、家の中には本と呼べるようなまともな本は

このように、文学とは一切無縁のわが家で、山本有三は特権的な存在であったが、しかし、そのことは逆に、思春期を迎えて下層中産階級的メンタリティに激しく反発するようになった私にとっては凶と出た。いまふうにいえば、「山本有三はダサイ」と高校生の私は感じたのである。

しかし、その一方で、文学全集に収録される作家は全部読むという禁欲的なモラルを実践していたため、たとえ「山本有三はダサイ」と思っていても彼の巻を読まずに済ることはできなかつた。後回しにはなったが、ちゃんと全巻を読み通したのである。

すると、驚いたことに、「下層中産階級のアイドル作家」という父親経由のイメージは消え、山本有三はむしろ近代文学の中では珍しい主知的な作家ではないかという感想を持つにいたつた。

それは、一高・東大文学部を通して芥川龍之介や菊池寛などと同級で、第三次『新思潮』同人に名を連ねたという山本有三の経歴を改めて眺めてみれば、当然のことなのである。山本有三は、専門のドイツ文学を始めとして、ヨーロッパの近代文学を咀嚼することで文学的な出発を遂げたインテリ作家なのであった。

とりわけ、こうした「インテリ作家・山本有三」のイメージを強くしたのが『波』という小説だった。なぜなら、『波』には『路傍の石』や『眞実一路』にある下層中産階級的な禁欲性が全く感じられないからである。登場人物の設定や背景は日本的だが、ナレーションの構造はむしろモダンである。

こうした『波』の印象の因つて来たるところは、私が大学に進学し、フランス文学、なかでもバル

ザックを読むようになつてから、おぼろげに分かってきた。山本有三は、日本の私小説的な伝統の中ではなく、バルザックを始めとする西欧近代文学の遺産から、その文学を構築しようと考えていたブッキッシュな作家なのである。

その印象を強くしたのが、バルザックの私生活情景に属する小説、なかでも『オノリーヌ』という中編を読んだときである。

『オノリーヌ』はジェノヴァの晩餐会で、彼の地を訪れた女流作家カミーユ・モーパンを相手に、ジェノヴァ総領事モーリス・ド・ロスターが自分の上司オクターヴ伯爵の恋愛事件について語るという形式の額縁小説である。オクターヴは二六歳のとき、幼なじみの十九歳のオノリーヌと結婚し、若妻に対して夫というよりも先生のように振る舞つたが、あるとき帰宅して、妻が置き手紙を残して愛人と出奔したことを知る。それから一年半後、オノリーヌが愛人に捨てられ、無一文の状態で妊娠していることを人から教えられたオクターヴは妻に知られぬように手を回して出産の手助けをし、赤ん坊が死んでからは造花女工としての自活の道までつけてやる。さらに部下のモーリスを妻の家にスパイとして送りこみ、出奔の真の動機を探らせる。その後、糾余曲折があつた後、オノリーヌはオクターヴのもとに戻つて長男を出産するが、結局、最後まで夫を愛することができぬまま、モーリスに宛てた手紙で夫は妻に理想の花を求めてはならないという告白をして死ぬ。

私はこれを読んだとき、『波』の源泉は『オノリーヌ』にあつたのかと思つた。幼妻に教え子のような態度で接している教養ある夫が妻の愛を得ることができずに何度も裏切られるという筋書き、

幼妻が置き手紙で出奔を知らせるという小道具の使い方、愛人に裏切られた妻が夫のもとに戻つた後、幼子を残して死ぬというラスト、いずれも『波』に酷似している。少なくとも、『波』の第一部「妻」はよく似ている。

しかし、こう書くと、山本有三はバルザックから盗作したと主張していると誤解されそうなのであらかじめ断つておくと、この程度の類似で盗作うんぬんはナンセンスである。どんなにユニーカな作品でも過去の文学作品を精査すればかならず類似の筋書きが見つかるものだからである。

私が言いたいのは発想の類似という点で両者が同じ範疇に属するということである。つまり、女性は、保護者的な男性に対する「尊敬」を「愛情」と勘違いすることはあっても、それは本質的に「愛情」ではないがゆえに、一時の気の迷いが消えれば、容易に男性のものを去つてゆくという「眞実」が共有されているのだ。

だが、今回『波』を読み返して山本有三の真意は、どうもそれを越えたところにあるような気がしてきた。「愛情の非対照性」の問題である。山本有三が『波』に託したのは、愛情というものは単に男女の恋愛に限らず、親子の間においてさえも、そのベクトルは本質的に一方指向的であり、双方的なものとはなりえないという悲観的な認識ではないかということだ。幼妻が「先生」を愛せないだけではないのだ。そもそも愛そのものが目的に達し得ないことを運命づけられた悲しき果実なのである。

主人公の行介は教え子のきぬ子を愛するが、きぬ子は行介を愛さずに学生の涼太郎を愛する。進の里親となつた高子は行介を愛するが、行介は

高子ではなくその妹の襲子を愛する。父親の行介は息子の進を愛するが、進の愛は父ではなく、志村夫人に向けられる・・まさに不毛なロンドであり、愛は報いられぬものと決まっているのだ。あるいは、シェイクスピアの『真夏の夜の夢』あたりから着想を得たのかもしれない。

以上のような意味からして、山本有三は誤解された作家であるといえる。西洋近代文学を深く読み込むことから出発した歐文脈の作家というのが彼の本質だからである。

山本有三を西洋近代文学の影響というコンテクストから再評価する動きが待たれるところである。

◆◆◆◆◆

#### 《執筆者紹介》

鹿島 茂（かしま しげる）



1949年横浜市生まれ。専門は19世紀フランス文学だが、書評、パリや古書に関するエッセイ、性愛論、小説など、広範な執筆を続けている。『職業別・パリ風俗』（1999年 白水社）で読売文学賞、『成功する読書日記』（2002年 文藝春秋）で毎日書評賞を受賞。近著に『文学全集を立ち上げる』（共著 2010年 文春文庫）、『パリの秘密』（同年 中公文庫）などがある。明治大学国際日本学部教授。

## 山本有三記念館ボランティアリポート③

記念館で活動中のガイドボランティアより  
交代でリポートをお届します

### 大きな“路傍の石”

記念館の入口脇に“路傍の石”と呼ばれるとても大きな石があります。「これが？」との声もよく耳にします。

山本有三の代表作「路傍の石」の連載が、二度も中絶の已む無きに至ったことは有名です。作者としては、道端の小石のようにちっぽけな存在であった吾一少年が、大変な努力と苦労の末に、大きな岩のように存在感のある人間へ成長し完結する物語を構想していたのではないでしょうか。そう考えると、大きな“路傍の石”も納得が出来ますね。

(小林一郎)

### ◆◇「路傍の石」と鉄道 ◇◆

川本三郎氏（評論家・翻訳家）が「すばる」に連載中の「鉄道、そして文学へ—地方と東京、近代と現代」第8回（2010年1月号）で、有三の「路傍の石」が取り上げられています。

地方都市で育った日露戦争前後の子どもにとって、いかに鉄道が感動的であり同時に怖れの対象であったか。また若者にとっては自由な世界、明るい未来の象徴でもあったことなどを、「路傍の石」の名場面や他の作家の作品を引用しながら考察しています。このような視点から「路傍の石」を読み直してみると、作品の新たな魅力が発見されるのではないかでしょうか。

### 編集・発行

## 三鷹市山本有三記念館 Mitaka City Yuzo Yamamoto Memorial Museum

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀2-12-27  
TEL0422-42-6233 FAX0422-41-9827  
ホームページ <http://mitaka.jpn.org/yuzo/>

開館時間：午前9時30分～午後5時

休館日：月曜日・年末年始（12月29日～1月4日）

※月曜が休日の場合は開館し、翌日と翌々日を休館。

入館料：一般300円（20名以上の団体200円）

※中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、  
校外学習の高校生と引率教諭は無料。

アクセス：JR中央線三鷹駅より徒歩12分

JR中央線・京王井の頭線吉祥寺駅より徒歩20分

### 作品と記念館の未来

有三の作品の多くは、残念ながら、現在刊行されておりません。解説の途中で、「図書館で借りて、私も読んでみます。」と、来館者の方から言われたりすると嬉しくなります。

「いかに生きるか」を書いた真摯な作品と、人の温もりを感じさせるこの記念館の不思議な魅力を、もっと多くの人に知っていただきたいと思います。百年後、千年後、作品はどのように読み継がれているのでしょうか。その時、記念館は……？庭園の赤松を見ながらふと考えます。（細谷久子）

### 講演会「小説家・山本有三の時代」

三鷹ネットワーク大学との協働で、3月27日（土）に当館主催の講演会を開催しました。今回のテーマは山本有三が小説家として最も充実していた昭和初年から10年代頃の文壇状況と、その中における有三文学の位置付けです。有三は「真実一路」連載中の1936(昭和11)年に吉祥寺から三鷹へと転居しましたが、その3年後、同じ三鷹村下連雀にやってきたのが太宰治でした。再び有三が転居する1946(昭和21)年まで、疎開中を除いて、有三と太宰は歩いてわずか5分ほどの所に暮らすこととなります。

日本近代文学が専門で太宰に関する著書もある東郷克美氏は、「三鷹下連雀の住人」として、有三と太宰という対照的な二人を比較しながら、有三の作家的位相について考察を加えてくださいました。

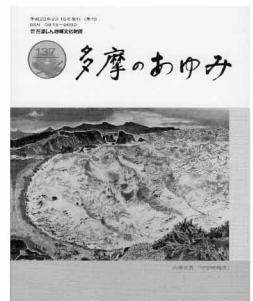


講師：東郷克美氏（早稲田大学名誉教授）

### 当館パンフレットが紹介されました

(財)たましん地域文化財団が年4回発行する多摩の地域誌「多摩のあゆみ」の「本の紹介」欄に、文学館の刊行物としては初めて、当館発行の『解説

三鷹市山本有三記念館』が紹介されました。執筆は後藤治氏（工学院大学教授）。「館本来の文化教育施設としての素晴らしい取り組みを示すもの」との評価をいただきました。



「多摩のあゆみ」第137号  
2010年2月15日発行